

『朝鮮文朝鮮語講義録』の発音法に関する 二つの記事の内容分析

—学習書の分類基準を定めるために—

呉 大 煥

はじめに

1. 構成の比較
2. 母音の記述
3. 二重母音の記述
4. 子音（初声）の記述
5. 平音—激音—濃音の対立の記述
6. 終声（パッチム）の記述
7. 所謂「音の変化」の記述
8. 学習書としての特徴

おわりに

はじめに

1920年代の朝鮮半島では、朝鮮総督府の政策により、内地から朝鮮に赴任した警察官などの官吏を対象にする「朝鮮語教育」が活発に行われていた。この時期を境目として、朝鮮語教育にさまざまな変化が現れ、教育活動や学習書も進歩していったと思われる。この時期の状況を明らかにするには、朝鮮語の学習書の発刊や講習会の開催などの朝鮮語教育に携っていた団体として「朝鮮語研究会」¹⁾に注目する必要がある。

この団体は、1924年9月から1925年9月にかけて『朝鮮文朝鮮語講義録』という雑誌を刊行した。また、その雑誌の刊行が完了された後は雑誌に連載された内容から重要なものだけを抜粋し、製本した、同じ題目で三巻構成である『朝鮮文朝鮮語講義録』の合本版も発刊された。この雑誌と合本の二つの形で発刊された『朝鮮文朝鮮語講義録』の中には、初心者向けの朝鮮語の発音に関する記事が二つある。一つは「朝鮮語発音及文法」（以下「文法」と称す）の「諺文の発音」の部分であり、もう一つは「朝鮮語会話」（以下「会話」と称す）の「諺文」の部分である。雑誌から合本にする際、ある程度の編集過程があり、記事の入れ替えなどが行われ、合本には異本がある。雑誌にはあったが合本に掲載されなかったり、版本によって除かれたりした記事もあるが、なぜか「諺文の発音」という内容に関してはすべての合本に上記の二つの記事が掲載されている。

本稿では、この二つの記事の内容を分析し、発音に関する記述の相違点を明らかにすることを目標とする。この相違点が明確になると、当時の朝鮮語の発音教育の状況が把握でき、さらに、その相違点が発音教育用の学習書の分類基準となると予想される。

今回分析・考察の対象にしたのは、色々な合本版の中、韓国で影印された亦楽出版社の

合本『朝鮮文朝鮮語講義録』上巻に載っている記事である。

1. 構成の比較

「文法」と「会話」における発音に関する内容を、両記事の目次を整理してみると次の通りである。

表1 目次の比較

「朝鮮語発音及文法」：諺文の発音		「朝鮮語会話」：諺文	
1. 中聲（母音）	（1～3頁）	1. 母音	（1～3頁）
2. 初聲（子音）	（3～15頁）	2. 子音	（6～9頁）
3. 終聲（子音）	（15～22頁）	3. 綴方	（9～14頁）
4. 重終聲	（22～23頁）	4. 詰音	（15～16頁）
5. 重中聲（其一）	（23～24頁）	5. 音の変化	（16～23頁）
6. 重中聲（其二）	（24～26頁）		
7. 重初聲	（26～28頁）		
8. 発音上注意すべき要点	（29～30頁）		
9. 轉音	（30～40頁）		
10. 高低音	（40～42頁）		

目次から読み取れる両記事の違いは以下の通りである。

「文法」は、母音関連の4つの節と子音関連の4つの節でハングルの発音について説明しているが、「会話」は、母音と子音と詰音という3つの節にわたって文字の発音について説明をしている。「会話」には朝鮮語の音節の特徴である終声の表記に用いられる子音字については別の節がたてられているわけではなく、日本語より数が多い二重母音に関しても言及されていない。「会話」では二重母音の‘ㅏ、ㅑ、ㅓ、ㅕ’以外の二重母音については説明せずに、「綴方」の諺文表の中で表記と発音を提示しているのみである。

また、「会話」にはないものの、「高低音²⁾」という節が「文法」には別途に置かれている。「高低音」というのは、母音の長さという超分節音素のことで、他の学習書には含まれていない学習項目である。このような母音の長さは当時の京城語における語彙の特徴ではあったが、現代の韓国語と同様にその重要性は衰えていたようである³⁾。しかし、「文法」は必要な学習項目として取り上げている。

他に、現代の発音教育と違う点は、「重初聲」と「詰音」という濃音に関する節が独立されていることである。現代は濃音と言われる音について別の節になっていることから、当時の発音教育は、朝鮮語の音中心の教育よりは表音文字であるハングルの各文字の音価を中心に教育することが主な教育目標であったということが分かる。両記事の前書きにも書いてあるように、「朝鮮語の発音」よりは「諺文の発音」を教えているということである。

2. 母音の記述

両記事の学習項目として最初に母音について説明していることが目を引く。ハングル文

(三) ㅑ 国語の「オ」と「ウ」の中間に位する音なるも時に「オ」に近く発する場合と「ウ」に近く発する場合の二様あり口を僅に開き咽喉孔を稍太くして軽く「オー/ウー」と発音すべし
ㅑ 『ㅑ』は圓い『オ』であるが之は平い『オ』で即ち『ㅑ』とならぬ様に口を自然の儘に開けて咽喉より出る音を口腔の機関で細工せずにその儘出すこと
(四) ㅇ ㅣ (イー) とㅑ (オー) の合音「イオー/イウー」なり縮めて軽く「ヨー/ユー」と発音すべし
ㅑ 『ㅑ』は圓い『ヨ』であるが之は平い『ヨ』で即ち口形は「ㅑ」の場合と同じく唯「ㅑ」と同時に発音すること
(五) ㅓ 国語の「オ」に近似するも、只僅に上唇を尖縮して軽く「オー」と発音すべし
ㅓ 口先を丸くして『オ』と発音すること
(六) ㅕ ㅣ (イー) とㅓ (オー) の合音「イオー」なり、縮めて軽く「ヨー」と発音すべし
ㅕ 『イ』と『ㅓ』を合わせたもので口先を丸くして『ヨ』と発音すること
(七) ㅗ 国語の「ウ」に近似するも只僅に下唇を尖縮して、軽く「ウー」と発音すべし
ㅗ 口先を丸くして『ウ』と発音すること
(八) ㅛ ㅣ (イー) とㅗ (ウー) の合音「イウー」なり縮めて軽く「ユー」と発音すべし
ㅛ 『イ』と『ㅗ』を合わせたもので口先を丸くして『ユ』と発音すること
(九) ㅡ ㅗ (ウー) と異なり齒を閉じ唇を平たく開き軽く「ウー」と発音すべし
ㅡ 上下の齒を噛み付け唇を開け得る限り開けて「ウ」と発音すること即ち「ㅓ」は圓い「ウ」で「ㅡ」は平い「ウ」であります
(十) ㅣ 国語の「イ」に酷似す即ち軽く「イー」と発音すべし
ㅣ 上下の齒を噛み付けて『イ』と発音すること
(十一) ㅑ ㅓ (アー) の如く「アー」と発音すべし此音は本来「アー」に非ずしてㅣ (イー) ㅡ (ウー) の合音(イウ) なりしが慶尚忠清地方の学者に語られて何時しかㅑ (アー) に近き音に変ぜしものなり
ㅑ 創作の時は独立の音を現す中聲であったが今日では特別の場合を除くの外「ㅑ」と殆ど異なることがないから「ㅑ」と同音のものと心得ること

以上のように比較してみると、「文法」における説明の順のように、‘ㅑㅓㅕㅗㅛㅙㅛ’までは日本語の母音の発音と同じく発音すればいいことが分かる。しかし、残りの‘ㅑㅓ’の発音法については「会話」と「文法」ともその説明が一致していない。

「会話」には、‘ㅑ’の発音には2つの音があって、一つは「オ」に近い発音で、もう一つは「ウ」に近い発音であると書いていることは非常に興味深い記述である。現在は殆ど区別しないようになったが、ソウル方言の‘ㅑ’の発音には[ə]と[ʌ]の音があるため、その音の違いが記述されていると考えられる。この記述は著者が外国人であるからこそ注目したことではないかと予想できる。しかし、カタカナで表記されている音では現実音の‘ㅑ’の発音が実現するのは難しいだろう。

一方、「文法」では‘ㅑ’の発音について、主に先に提示された‘ㅓ’の発音と異なることを注意している。このような記述の根拠は、おそらく韓国語の音韻体系上の「弁別素性」にあると考えられる。少なくとも、その違いだけを区別して発音すれば、‘ㅓ’と‘ㅑ’の発音はある程度母語話者に聴覚的に区別できるからである。母語話者には[ə]と[ʌ]の違

いは、「会話」の記述のように「オ」と「ウ」のどちらに近いかよりは音の長さで弁別していたと考えられるため、「文法」を書いたネイティブである著者はそういう記述はできなかっただろうと思われる。

このような「弁別素性」を利用した発音法の記述は他の母音字でも利用されている。‘一’の発音法の説明にも、「ㄷ」は丸い「ウ」で、「ㅡ」は平い「ウ」であると記述されている。これも母語話者には母音の円唇性によってこの二つの母音を区別可能であるため、弁別素性の[+ROUND]を強調しているのである。

以上のようなことから「会話」と「文法」の発音法の記述の特徴をまとめると、次のとおりである。「会話」は個別の音を調音音声学的な特徴を中心に記述したものであるのに対して、「文法」は母音における調音音声学的な特徴だけではなく、音韻体系の中での各母音の弁別素性を利用して記述されたものであるといえよう。

両記事の注意書きのような文にもその違いが明確に記述されている。

‘以上母音の発音法に就いて注意を要するは諺文の母音は国語の母音に比し輕軟にして長調なる音性を有するが故に国語の母音の如く「ア」「イ」「ウ」と短く切らずに反長音的に「アー」「ヤー」「オー/ウー」「ヨー/ユー」と軽く引き、その終尾を自然に消滅せしむる如く発音するを要す。’「会話」3頁

‘以上述べたことは極通俗的であります、之を幾度となく繰返して形と音とを記憶してから次に移ることが肝要であります。中聲の中で五十音の母音に最も近きのを出せば次の如くなります。…（中略）…

即ち『ㄷ』は五十音の『オヨウ』と比較的なき音で、『ㅛ』は仮名では表示し難いのでありますから『ㄷ』と『ㅛ』を少しでも混同せぬ様注意することが最も必要なことあります。’「文法」3頁

3. 二重母音の記述

現代の二重母音とは異なるが、それに該当する学習内容が両記事にある。「会話」では「復母音」と称しているもの、「文法」では「重中聲」と称しているものがそれに当たる。この用語は母音字を二つ以上重ねて表記することを示すものである。現代の二重母音という音の中には[ㅑ, ㅓ, ㅕ, ㅗ]などの音も含まれるが、両記事ではこの音の文字を単母音のように記述しているため、両記事の「復母音」・「重中聲」というのは二重母音とは異なるものであり、唯単なる重ね書きされた母音字の発音のことである。

「会話」では「復母音」に関する説明は全くされず、「綴方」で音節表記の例を提示しているところに「復母音」という用語とその例が扱われている。提示された音節表記の例から「復母音」の文字を整理すると以下のようである。

‘ㅑ, ㅓ, ㅕ, ㅗ, ㅛ, ㅜ, ㅠ, ㅡ’

このように母音字の例を提示しているものの、「復母音」の音価については説明がないため、音価を調べるためには振り仮名を参考にせざるを得ない。その振り仮名を見ると、

すべては構成された文字通りになっており、現代の二重母音字の発音とは異なることが多い。

しかし、「文法」の方には、「重中聲（其一）」「重中聲（其二）」に分けて詳しく説明している。「其一」は ‘ㅅ, ㅈ, ㅊ’, 「其二」は ‘ㅁ, ㅂ, ㅅ, ㅇ, ㅈ, ㅊ, ㅌ, ㅍ, ㅑ, ㅓ, ㅕ, ㅗ, ㅛ, ㅜ, ㅠ, ㅡ, ㅞ, ㅟ’ について記述している。「其二」の母音字の中には使われていなかった文字も幾つかあって、それについては ‘実用上必要なし’ と説明されている。

「其一」の母音字は現在の発音と同様であるため、「其二」の母音字の中で現代の音と異なる文字を中心に検討したい。時が経って現代に至るまで、表3からもわかるように、二重母音字の発音は急激な音の変化をこうむり、両記事の発音に関する記述が明確に異なっている。

表3 重中聲の音価比較⁴⁾

母音字	「会話」 ⁵⁾	「文法」 ⁶⁾	現行音 ⁷⁾
ㅁ	アイー	アエ	/ɛ/
ㅂ		ヤエ（実用上殆ど必要なし）	/jɛ/
ㅅ	オイー	エ	/e/
ㅇ	ヨイー	ヨエ又はイエ	/je/
ㅈ	オイー	オエ	/we/
ㅊ	ウイー	ㄸイ	/wi/
ㅌ	ユイー	実用上必要なし	
ㅍ		ーイ	/uji/
ㅑ	アイー	ㅁと変りなし	
ㅓ	ワイー	ウワエ	/we/
ㅕ		ウエ	/we/

表3のように、同じ母音字でも「会話」と「文法」で記録されている音価が異なることが分かる。その理由として、恐らく「会話」に記録された発音は19世紀の二重母音の短母音化が起こる前の音の記録であり、「文法」での記録は当時の変化した音である可能性がある。当時の他の文法書を見ると、『우리말본⁸⁾』には「文法」の発音と同一な音価の記録もあるが、異なる記録もある。もう一つの推測として、当時は両記事のように二つの発音が存在していたということも考えられる。しかし、同一の雑誌の記事なのに母音字の音が一致していないことは疑問である。この疑問を解決するためには、その当時の他の記録との対照を行わなければならないため、解決は次の課題に残したい。

4. 子音（初声）の記述

初声になる子音の提示と説明について、両記事はかなりの違いがある。

「会話」では、『訓蒙字會』のように伝統的な各子音字の名称を利用して発音を提示している。次に文字が終声に使われた時の発音も同時に説明している。そのため、本章では初声の発音法と終声の発音法を分けて、まず初声だけを考察する。本章で「子音字」と称するのは、全部初声の子音字を指す。

「会話」の子音字の提示順は現行ハングルの順番とほぼ同様であるが、ただ激音の説明が‘ㅎ’音の後となり、‘ㄱ, ㄴ, ㄷ, ㄹ, ㅁ, ㅂ, ㅅ, ㅇ, ㅈ, ㅊ’と‘ㅋ, ㆁ, ㆅ, ㆆ’の14文字の順番になっている。それに対して、「文法」は激音の説明が‘ㅎ’の前になり、現行ハングルの順番と同じである。「会話」の提示順は、まず平音と激音を区別して提示することによって、激音の特性をより明確にしようとする意図があることや、激音の説明に‘ㅎ’の音を利用して学習者の理解を深めようとする意図が伺える。‘ㅎ’音の説明の後に以下のような文章がある。

‘以上各子音は平音と稱し、(ㅇ, ㅎの二字は他の八字に比し音性輕軟なるが故に之を輕音とも稱す) 母音と合して発音するときは、平常の音聲を以てすべきものにして、其の音調は、恰も内地人が五十音を読む位の程度にてよろしきも、之等子音とても元々五十音に比しては、輕軟なる音性を有するが故に、其の気分を以て読むことに留意せらるべし。’
「会話」 8頁

この説明は激音と比べて平音は軽くて軟らかいという特性を強調しようとしていることであると思われる。さらに、朝鮮語の「音調」が日本語より軽くて軟らかい「音調」であることを強調しようとした。これは、母音についての説明と類似しており、母語話者のような完璧な発音を学習者に求めようとした著者の意図がみられる。このような説明は「文法」では見当たらないことである。

現代の発音教育なら、激音の次に濃音を提示するのが定番であるが、前2章で指摘したように両記事では濃音は子音として扱われず、その提示が別の節になっている。その理由は、おそらく当時の正書法に影響されたのではないと思われる。当時は現行の濃音の文字が認められておらず、‘ㅎ’を並書した文字で濃音を表記したため、単独の文字がない音は同じ子音文字としては認識されなかったようである。

この子音字に関する両記事の記述上の相違点は次の通りである。「会話」ではカ行の音、ナ行の音のように子音字の音価だけを日本語の音に例えて説明している。韓国語の子音は単独では発音されず、母音との組み合わせによって音節が構成され、それを発音されるが、ここでは母音字と組み合わせた音節の表記は見当たらない。一方「文法」では、子音字の音価と母音字と組み合わせた音節の発音についても記述している。この音節の表記に関して「会話」は、別途の節「3. 綴方」を立てて例だけをあげている。

両記事とも子音字の発音については日本語の子音の発音と照らしつつ、説明している。韓国語の子音の中で日本語の子音と最も体系が異なる音は「タ」行の音である。その「タ」行の子音字をどのように記述しているかを考察する。

「会話」は、

‘ㄷは「テ (チ)、グツ」と読むべし。音性は国語の「タ」行中の「タ」、「テ」、「ト」の発声と同じ。’
「会話」 7頁

という簡略な説明しかない。‘ㄷ’の名称の表記に「テ (チ)」という振り仮名を使ったのは、「テ」の子音と「チ」の母音の音であるということであると考えられる。つまり「テ

と述べている。‘ㅍ’の発音は日本語にも独立した文字がないため、母音「イ」との関連性を利用して説明しているが、音節表記の例はない。また、‘ㄷ’音との関連性についての説明も見当たらない。しかし、「文法」の説明にはもっと詳しい情報が記述されている。

‘ㅍ (Ch) 「チャ」 行の初声。

다行に於ける다더도두디音の外別に사行より變化したる자行があります。即ち자자 저저 조조 주주 즈지즈。

此行も사行と同じく中聲のトヨムハはトヨム下と発音に於て変わりがありませぬ。即ち자저조주는자저조주と同音になります。それで発音の實際に於ては左の如くなります。

다=자=자 同音、더=저=저 同音、도=조=조 同音、두=주=주 同音、디=지 同音

でありますから此の行では자저조주지의発音を記憶すれば宜しいのであります。又純粹な朝鮮語を書くには「다더도두디」又は자저조주を用ひず唯자저조주지を用ひて宜しいのであります。『文法』8頁

このように、「文法」は、音価の提示は勿論、当時の発音の變化に伴う表記と発音とのズレを指摘し、関連性のある文字とも比較しつつ、正しい発音法と表記法まで説明している。

以上、平音と激音の提示と、‘ㄷ’と‘ㅍ’の記述を比較しながら、初聲の発音法に関する記述を検討した結果、「会話」と「文法」の子音に対する説明の仕方が異なるのが分かった。「会話」は諺文の文字の音価を提示することが記述の目的であるのに対して、「文法」は音価の提示を含めて、實際の音と文字の運用に関する説明までが記述の目的であったといえよう。

5. 平音—激音—濃音の対立の記述

韓国語が日本語の子音の音韻体系と大きく異なる点は、平音—激音—濃音の対立があることである。本章ではこの対立関係がどのように記述されているのかを考察することにする。

まず、激音については両記事ともに大抵の説明は平音とともに「ハ」音を出すことであると説明している。

「会話」では、四つの激音について同じような説明が簡単に4行で記述されているだけである。「文法」では、音によって発音法の詳細を記述したという異なる点があるが、基本的には平音の‘가다바자’の音と「ハ」音を同時に発する音である説明している。しかし、「文法」の記述の中で注目すべきことは、日本語の音と比較しつつ、平音の音価と比較している点である。

激音の‘차’の説明では日本語の「チ」音と比較説明しながら、その説明の中で平音との違いを提示している。

‘…五十音の「チ」は「ジ」より強く「치」より弱き音でありまして全然「チ」に当る音はないのであります。唯「지」が「チ」に比較的に近いのであります。『文法』10頁

のように、日本語の「チ」を基準にして平音と激音の差が分かるように記述されている。
‘타’の説明では、

‘타’は「다」より強く「타」より弱い音であるから「다」は極く軽く発音すること…
「文法」11頁

のように記述されている。

‘파’については、

‘마’とハ音を同時に発音するものでありまして唇を閉じて力を入れて息を口先に十分に詰めてから急に唇を開けながら「パ」と発音すれば宜しいのであります即ち마마머머…は「パ」より軽く息を加はらぬ様にし 파파퍼퍼…は「パ」音を二つ重ねる様に息を加へて強く発音すること…「文法」12頁

のように説明している。

以上のように、「文法」には平音と激音の区別がつくように発音法に関する詳しい説明が記されているのである。

一方、濃音については、両記事ともに別の節を立てて、「会話」では「詰音」、「文法」では「重初声（된시옷）」となっている。「会話」における「詰音」についての説明は以下のようなものである。

‘…此音は咽喉に十分に息を詰め、一時に強く放ちて、音を発するものにして、国語に依りて例ふれば、「マッカ」（真赤）「キツ」（屹度）などいふとき。其の形容力を更に大にせんとして、一層力を込めて、強激に発音したる場合に、最初の「マ」「キ」を除き去りたる「ッカ」「ツト」の音は、即ち詰音 ㅍ（ク） ㅌ（ッ） ㅍ（ク） ㅌ（ッ） となるなり。拙稿会話編には普通の濁音如く振假名したるも、濁音とは異なるものあるに付き、会員諸子は上記の方法に依りて発音せられむことを望む。’「会話」15頁

以上のように、息を咽喉に詰めて一気に強く放す音であるとされているが、このように強く息を発すると激音に近い音になるため、正しい表現だとはいえないだろう。むしろ、その補足説明の日本語の例の方が理解しやすいのではないと思われる。また、この音が濁音とは異なるにも係らず仮名表記を濁音のように扱っている点は理解し難いところがある。

「文法」の「重初声」の説明は以下のようなものである。

‘된시옷’とは…（略）…重初声なるものは其発音こそ仮名に於ける濁音と少しく相違がありますけれども音の性質としては同一関係のものだらうと思ひます。左に参考の為に重初声の行と濁音の行とを対照して記します。

重初声	ㅍ	ㅌ	ㅍ	ㅌ	ㅍ
濁音	ガ	ダ	バ（パ）	ザ	行

……

가 「カ」を軽く発すること

카 「カ」と「ハ」を同時に発すること（此場合は息を強く吐くこととなる）

까 「갓가」の「ハガ」、「ミック」の「ッカ」を咽喉で発し息を外に吐かぬこと寧ろ息を呑みこむ気持で発音すること（以下同断）、「文法」26～27頁

となっている。

濁音と比較している所では重初声の音価が分かりにくいところがあるが、上記した説明の例のような、平音、激音との比較でその音価の詳細が分かるようになっている。

「会話」の説明だけでは子音の体系などの情報が不足しているため、平音－激音－濃音の対立を理解することはできなかつただろうが、「文法」の説明を熟知していれば、濃音の発音ができないうことではなかつたといえよう。両記事における説明の相違点は、まず著者が子音の対立関係を念頭に置いたのかどうかというところにあるといえよう。「会話」では対立関係の子音との比較がないため、日本語母語話者にはその三つの音の違いを理解するのが大変難しかったと思う。一方、「文法」の記述は説明の仕方に難解なところがあるものの、その対立関係を比較することによって学習者が理解できるようになっていたため、該当の発音を習得することが容易であつたのではないかと考えられる。

6. 終声（パッチム）の記述

本章では終声（パッチム）について検討してみる。終声は韓国語学習上、もっとも習得しにくい音である。このような終声をどのように説明しているかを比べてみたい。

「会話」では、終声に関する節は設けられていない。3章で述べたように、「子音」の節で唯子音字の名称を利用し、終声の表記に用いられる8個の子音字の発音法を説明している部分と、「綴方」の最初の解説の部分に書かれた説明があるのみである。「重終聲」についても「綴方」の一角で少し触れているだけである。一方「文法」では、終声について「終聲（パッチム）」と「重終聲」の節を設けて詳しく説明している。

終声に用いられる文字の提示方法を比較してみると次のようである。

「会話」は、まず「子音」の節で次の子音字の表を使って提示している。

表5 「会話」の子音字の表

キ、ヨク ㄱ	ニ、ウヌ(ン) ㄴ	テ(チ)、グツ ㄷ	リ、ウル ㄹ	ミ、ウム ㅁ	ピ、オブ ㅂ	シ、オツ ㅅ	ハインゲ ㅇ
ス ㅆ	ギ ㄱ						
フ ㅍ	ヒ ㅍ	ト ㅌ	フ ㅍ				

この中で上一段の子音字が初声と終声の表記に用いられる文字であると説明し、その名称を振り仮名で記している。初声に関する記述と一緒にあるため、初声に関する記述は略して、終声の記述だけを検討する。その終声の発音法については次のように記述している。

‘(一) ㄱ … (略) … 終尾の「ク」は、明かに口外に現さず、其の半を、口中に留むる如く発音すべし。(以下ㅇ音に至るまで同一なり)’

- (二) ㄴ … (略) … 音尾は口中に「ヌ」を抑へつつ「ン」と発音すべし。
- (三) ㄷ (説明なし)
- (四) ㅃ … (略) … 終聲では「L」音に発音す。
- (五) ㄹ (説明なし)
- (六) ㅍ (説明なし)
- (七) ㅍ … (略) … 終聲と為りたるときは、「S」又は「T」の音を発す。
- (八) ㅇ … (略) … 終聲となり… (解読不可能) … 「ング」(羅馬字の『ng』)の音を発す。『会話』6～8頁

以上のような簡単な説明しかない。このように「会話」の記述には幾つかの問題点がある。まず、当時朝鮮総督府が定めた「朝鮮語綴字法」には、終聲の文字として‘ㄷ’は認められていなかったため、説明がないことは理解できるが、終聲の文字であった‘ㄹ、ㅍ’の説明がないことは理解できない。また、この部分では「終聲」という用語は使っているが、終聲の意味については説明がない。その「終聲」に関する説明は3節の「綴方」の解説の最後の部分に初めて提示している。

‘斯の如く綴合せたる場合に於て、音の初頭に置かれたる子音を、初声と云ふ。之に配したる母音を、中聲と云ふ。終尾の子音を、終聲(朝鮮語にてパッチム)と稱す。’『会話』10頁

このような解説の後には、終聲について何も書いておらず、振り仮名付きの音節表記の例が出ているだけである。学習者の立場から考えてみると、果して発音法の理解ができたであろうかという疑問が残るところである。

「文法」の説明は、「終聲」では終聲の表記法の変化を始め、現代の韓国語教育にも通用できるように各子音字が終聲に用いられた場合の発音法も説明されている。そして、最後の部分には日本人の学習者にとって混同しやすい終聲の発音を比較して分かりやすく記述している。下記は一例である¹¹⁾。

‘ {	ㄷ……………	舌を口内の上部に附けないこと	「文法」21頁
	ㅌ……………	舌端を上歯の内部に附けること	
	ㅍ……………	唇を閉ぢること’	

「文法」の「重終聲」では、‘ㅃ’の重終聲のみ記載されているという点が特徴である。現代の韓国語とは異なって、当時は正書法上この‘ㅃ’の重終聲だけを認めていたため、他の例は挙げられていない。

‘必要に応じて終聲に二つ附くものがあります。是も歴史上及理論の上からは各種の終聲が組合せになって附く譯であります。今日現行のものとしては終聲『ㅃ』と他の終聲とが組合せられて附くのでありまして…’『文法』22頁

その発音法としては次のように述べている。

‘…二つ附くと言っても一字の場合は二つながら同時に発音されるものでなく唯その中の或一音のみ（主に右側につくものが発音されて左側なる「ㄷ」が省かれる）が発音されるのであります。但しその下に叶行音が来た時は『ㄷ』のみが上の字について発音され右の方に附いてゐる終聲は下の叶行に來て初聲の働きをすることになります…」[「文法」22頁]

このような重終聲の発音法については、一つの音節表記だけではなく、母音との結合で発音するときの発音法 (liaison) まで考慮して説明されている。

しかし、「会話」では重終聲の発音法について、次のように簡単にしか記述されていない。

‘…又ガ『カー』(ka) にㄷ「ル」(l) とㄱ「ク」(k) を附して卦 (カルク) (kalk) と為すが如し。」「会話」10頁]

この説明も「文法」の説明とは異なり、文字通りの発音になっていて、次に母音から始まる音節と発音されるとき説明などは提示されていない。

「会話」の「終聲」に関する記述の特徴は終聲に用いられる子音字の音価だけを大事に扱っていたと見られるため、「母音」の発音とは異なって、説明が不十分である。「文法」での「終聲」の記述は前述したように、終聲として用いられる文字の違いを除くと、その記述が非常に優れており、現代の学習書に劣らない良質の説明であると思われる。ただ、連音の記述には幾つかの問題があるため、これについては7章で検討したい。

7. 所謂「音の変化」の記述

韓国語の音韻変動に関しても両記事は「音の変化」と「轉音」という別途の節を立てて説明している。こういう音韻変動について、両記事はどのような認識を持っていたのかを調べてみたい。まず、「会話」の「音の変化」の節に記されたのは、以下のようである。

‘諺文は原則として、書きたるままに発音すべきものなるも、二個以上連続するときは、其の子音中の一方が、音便に依りて他音に轉呼さるる場合あり。或は又上音の子音が、移動して、下音の初聲と為るものあり。また単独の場合に在りても、習慣上より、他音に読まるることありて、…」[「会話」18頁]

この説明では、表記と発音のズレを認識しているように見えるが、その音の変化が表記に影響を与えるのかどうかは記述されていない。

「文法」は、以下のように述べている。

‘…轉音とは、音便と解釈して差支ないですが日本語法に於ける音便の如く其の儘には記さず唯発音のみを轉換するのであります。」「文法」30頁]

この記述には「音便」という日本語学で通用されている用語が用いられているが、表記

には音の変化が現れないことを指摘しているのが読み取れる。

今度はその音の変化をどのように説明しているかを見てみたい。

次の表6を見ると、「会話」では11項目について説明があるが、「文法」では8項目になっている。表に付けられた番号は原文通りである。

どのような項目を立てているのかを比較してみることにする。

表6 音の変化

「会話」	「文法」
(一) 終聲のㄷは初聲のㄴ로ㄹ (ㄹはㄴ音に变ず) の上に在りてはㄴ音に読まる。	(一) 終聲 (ㅇを除く) の下に「아」行音が来た場合は発音上その終聲は「아」行の字の初聲の用をなします
(二) 終聲のㄴは初聲のㄹまたは終聲のㄹと初聲ㄴと相接するときはㄴはㄹ音に読まる。	(二) 「나녀뉴뉴니」が単語の頭字にある時は「아여유이」の如く発音します
(三) 終聲のㄹは初聲のㄷの上に在りてはに近き音に読まる	(三) 「라」行音が単語の頭字にある時は奇数の字は「나」行音に転じ偶数の字は아行音に転じます
(四) 終聲의は初聲의로ㄹ (ㄹはㄴ音に变ず) の上に在りてはㄹ音に読まる。	(四) 終聲の下の「라」行は「나」行に発音します。但し、「ㄴ」の下に於いては終聲「ㄴ」と初聲「ㄹ」とが転換して発音されます
(五) 終聲의는初聲의로ㄹ (ㄹはㄴ音に变ず) の上に在りてはㄴ音に読まる。	(五) 終聲「ㄷㅅ」の下に「나라마」行音のある時は「ㄷ」は「ㅇ」、「ㅅ」は「ㄹ」、「ㅅ」は「ㄴ」の如く発音します
(六) 終聲の子音は下語のㅇに通じ下語の母音と接合して聲音を成す。	(六) 終聲「ㄷㅅ」の下に「하」行音のある時は「카타파」の如く発音します
(七) 終聲의ㅅ는下語の初聲ㅇに接するときは其のㅇを通じ下語の母音と接合して激音となる。	(七) 諺文中「사」行、「다자」行、「타차」行に於て「샤셔쇼슈」は「사서소수」、「다더도두디」と「자저조주지」は「자저조주지」に「타터토투티」と「차처초추치」は「차처초추치」に発音し… (略) … 「ㄷㅅ」の中聲を用ひない… (略) …
(八) 初聲의는上語の母音又は子音ㄴ로ㅇを受くときはㅇと同様に発音せらる。	(八) 하行音は至って軽いから (六) の場合を除くの外音の下に於いて殆ど「아」行に近い音を発する場合もあります
(九) 初聲의는ㅅㅅㅅㅅに先行するときはㄴ音に読まる。	
(十) 初聲의는ㅅㅅㅅㅅに先行するときはㄴ音に読み又は全然読まざる事あり。	
(十一) 諺文は其の発声に在りて濁音となること無きも二語以上連続の場合に限りㄴ로ㅇの下に在るㄷㅅ는常に濁音に発せらる。	

比較してみると、「会話」の (一) (四) (五) は「文法」の (五) と同じ内容の「子音同和」の規則であり、(二) は「文法」の (四) の「流音化」、(六) は「文法」の (一)

の「連音」、(七)は「文法」の(六)の「激音化」、(八)は「文法」の(八)の「ㅎ音の弱化」、(九)(十)は「文法」の(二)(三)の「頭音法則」である。しかし、「会話」の(三)(十一)に該当する音の変動規則は「文法」では記述されていないし、「文法」の(七)に該当する規則は「会話」では記述がない。

「会話」の(三)の規則は、その当時の他の文法書にも記録はあるが、実際は必ずしも起こる現象ではなく、人によって、場合によって起こる随意的な現象である。例として挙げられているのは次のようである。

‘감기『感気』(感冒)は강기, 금광『金鉞』は금광, 담가(漬けて)는 당가’ 「会話」17～18頁

このようなを規則として定めることはかなり無理があると思われる。

しかし、「会話」の(十一)の「有声音化」は有声音と無声音の区別ができる日本語母語話者ならでの正しい指摘であると思われる。「文法」には、他の場合にも「有声音化」については一言も記述されていないため、その著者はおそらく有声音の認識がなかったか、又は、無視していたのではないかと予想される。この問題は、6章で考察したように、「終聲」の説明にも提示されていることであり、‘ㄱ, ㄴ, ㄹ’の終聲の音が次にくる母音との結合で発音される場合はこのような有声音化が現れるのが韓国語の特徴であるが、「文法」の著者は有声音(濁音)に関する知識がなかったか、又は無視していたように見られる。その「有声音化」についての知識は不十分の様である。

その他、「文法」の(七)は、韓国語の口蓋音化の規則の記述であるが、「会話」には全く述べられていない。「文法」では、初声の説明にもこのような音の変化に関する記述があったが、「会話」では、変化した音が振り仮名で記録されながらも、その音の変化については何も説明がなかった。日本語のタ行と同様であるから別途規則として扱っていない可能性もあると思われる。

以上の結果、音の変化に関する両記事の内容は全体的には一致する所が多いが、両著者の観点の違いも現れる。

「音の変化」を教育するためには、必修的な変動だけを教えることが望ましいことではないが、随意的な変化よりは優先すべきであろう。必修的な音の変化を学習する意味は正しい表現ができるようにすることに意味がある。随意的な音の変化の学習は、その次の段階になる理解力を上げることに役立つものであるがゆえに、初めて学ぶ学習者にはまず必修的な音変化を教えるべきだと思われる。

8. 学習書としての特徴

本章では両記事は、単なる文法書の一部ではなく、外国語の学習書としてどのような特徴を持っているのかを考察する。まだ近代の外国語学習書としての基準は別に定められていないため、現代の学習書の特徴と比べ、どのような差があるかを両記事から探してみたい。

両記事は被支配国の言葉を教える目標で作られたものであるがゆえに、朝鮮語学習書として認めるには異見がないはずである。

両記事の学習書としての特徴を探するため、現代の学習書の構成を参考にするが、現代の学習書というのは前時代の学習書を基に展開してきたものであるため、当時の学習書を研究するにも有用だと思われる。

現代の外国語教材は、①学習項目の提示②説明③練習課題④評価の構成要素を含めているのが一般的である。しかし、現代の教材は学習者も参加している教室内で対面の状況で使われるため、学習指導などは教授者に任せられ、教材に指導項目は記載されず、教授者の為の別の指導案が作られるのである。現代の教材と異なり、「会話」と「文法」の両記事はこのような学習指導に関する文章がよく現れるのが特徴である。

両記事の構成は前述したように、学習項目の提示と説明が記載されているのは勿論、学習項目以外の記述内容としては、学習者への注意書きがよく見られる。

例えば母音に関しては、2章で触れたように日本語と比較して、どのように発音すればよいかを記述した部分がある。現代の教材には記載されない学習要領があるのはこの時期の学習書の特徴だとも言えよう。特に「会話」には記述されていないものが、「文法」には、「発音上注意すべき要点」という項目で別の節として立てられ、発音の学習項目を以下のようにまとめて整理して注意させているのは興味深いところである。

‘イ。中聲に於ける紛れ易きもの

거,겨,그,

ロ。重中聲に於ける紛れ易きもの

개,괘,계,괴,

ハ。初聲に於ける紛れ易きもの

카,까,타,따,파,빠,차,차,

ニ。終聲に於ける紛れ易きもの

각,갓,간,강’

「文法」29頁

こういう注意点として指摘された項目は、まさに現代の韓国語教育の注意項目とも同様で、その以前の時代の学習書とは異なる進歩の仕方を見せている。

その他、「会話」にはないものの、「練習」項目が「文法」には各学習項目に続いている。語彙としての意味がない音節表記の読み例だけではなく、実際の単語や文章などを「練習」項目として用いているのが特徴として見られる。その語彙や文章の例も学習項目の進み具合に合わせて、少しずつ複雑な構造の組合せの語彙や文章を練習するように工夫されているのも特徴として見られる。

両記事の注意書きで最も異なる点は、諺文の発音練習のため、振り仮名をどのように使うのかという点である。「会話」は発音練習を全的に振り仮名に依存して練習するようになっていたのに対して、「文法」は振り仮名を利用する練習方法を否定して振り仮名の利用による弊害を強く注意させている。

‘若し中聲の傍に勝手に仮名をつけて好い加減に発音するが如きことがあっては後になって莫大な困難を感ずることになりますから初からよく注意せねばなりなせぬ。’「文法」3頁

このように「文法」の方は振り仮名を使って練習することを警戒している。

要するに、「会話」の場合は練習問題と評価の部分はないが、学習項目の提示や説明と学習指導などはあるため、当時の一般的な学習書の構成であるといえるのに対して、「文法」の場合は、進歩した現代の学習書により近い構成になっているといえよう。

おわりに

以上のように、『朝鮮文朝鮮語講義録』の「諺文の発音」に関する両記事の内容を比較考察した。

「高低音」を除き、主に両記事に共通するハングル文字の発音に関する学習項目を対象に、提示の順序と説明の記述を比較・分析したが、以下のようにまとめることができた。

1) 母音の場合は、現代の教材とは異なる点としては、単母音のみの提示ではなく、イ系二重母音字も提示されていることを確認した。これは現代の一部の教材にも見られることで、学習目標語の発音よりは母音の文字を優先して教育しようということであり、ハングル文字の特徴による誤認識の証である。母音とは‘音’の意味であるが、両記事の母音は母音字を指している。「会話」の提示の順序は一般的な母音の順番通りである反面、「文法」の順序は学習者の母語の知識を利用し、日本語にはない母音を特化して提示していることを確認した。母音字「ㅏ」と「ㅑ」の記述を中心に、母音の発音法の記述を比較・分析して、「会話」は振り仮名を利用して、音価を説明していることと、主に個々の母音のありのままの調音法が説明されていることが分かった。一方「文法」は、個々の母音の発音法は勿論、弁別索性や、母音と母音との関連性を利用して説明していることが分かった。

2) 二つ以上の母音字で構成されている「重中聲」や「復母音」の比較・分析を通じて、記述された音価にかなりの相違点があることが確認できた。両記事で説明されている重中声字の音価が異なっているため、その音価のように発音されたかどうかを確認する必要性が生じた。従ってその時期の重中声字の発音を記録した他の文献を検討することが今後の課題である。

3) 子音の場合は、両記事の提示の順序が大きく異なっていたため、初声と終声に分けて検討した。「会話」は平音と激音の提示順を厳密に分けてはいるが、その理由は、ただ日本語と比べ、朝鮮語の音調が軽くて軟らかいということを強調するために過ぎず、その音の対立関係までは考慮していなかったことが分析できた。また、主に「ㄷ」と「ㅌ」の発音に関する記述を中心に、その音価に関する記述の違いや、子音と子音との関連性に関する記述などの違いを見つけることができた。このような結果から、「会話」は子音のありのままの音価や音調を提示・説明しているということ、「文法」は個別の子音の音価だけでなく、子音間の関連性に注目して提示・説明しているという結論に至ることができた。

4) 子音の比較・分析で得た結論を、平音－激音－濃音の対立の記述の分析から一層確実に確認することができた。朝鮮語の場合は、この三つの音の対立は非常に重要なものであり、その記述の有無によって、各著者が音を構造・体系的に考えているかどうかを分析することができた。

5) パッチムの音に該当する終声の記述の比較・分析を通じて、両記事の記述が個別の終声の音を中心に説明されているものかどうか、また他の終声の音及び母音との関連性を

念頭において説明されているかどうかをもう一度確認することができた。勿論「重終聲」の発音の記述も同様であった。

6) 所謂「音の変化」に関する説明を比較・分析して、「文法」の著者が朝鮮語母語話者であるからこそ、説明できなかつたと思われる「有声音化」の規則が、外国語として朝鮮語を観察している「会話」の著者には分かっていたということを確認した。一方、「会話」では記述されなかつた「口蓋音化規則」が「文法」では説明されていることも確認した。

7) 最後に両記事の学習書としての特徴を分析したが、現代の教材と共通する点として学習項目の提示や説明ができているのは勿論、現代の教材との相違点として、学習指導の注意書きがあることを特徴として取り上げることができた。さらに、「文法」は、各学習項目の練習課題があり、評価はないものの、より現代的に進んでいる要素も含まれていることも確認できた。

以上のような比較分析の結果を踏まえて、当時の発音教育に使われた学習書の内容の分類基準として、次のような大まかな基準を立てることができる。

まず、当時の発音教育は、表音文字であるハングル文字に全的に頼って行われるという共通点はあるものの、教育の項目をその文字の個々の音の調音法だけにしているか、あるいは調音法はもちろん、音の対立関係を利用して音韻構造までを教育項目にしているかによって大きな違いが出る。

また、表音文字であるハングル文字の発音だけを教育項目にしているか、あるいは表音文字ではあるが、表記と発音のズレが表れる‘ㄷㅈㅊ’のように口蓋音化なども教育項目に含めているかによって分類ができる。

以上のような相違点は、この両記事に限らず、当時の他の学習書の分析の基準としても用いることができよう。

注

- 1) この団体については植田（2006）、植田（2007）、山田（2000）などを参照。
- 2) 「朝鮮語発音及文法」40頁、‘…音そのものには自ら高低（長短ともいふ）の別が依然残ってゐるから、茲に高低音の項目を設けたのであります。’本研究では、この高低音を単語の母音の長さを弁別素性（*distinctive feature*）にする長音と短音として扱うことにする。
- 3) 「朝鮮語発音及文法」41頁。‘…要するに音の高低を委しく辨へて、然る後に談話などを試みると言ふことは、固より結構なことでありますが、あらゆる音に就いて、一々その高低を知ってからと言ふことは到底不可能なことであります。故に本項目を書くに先立って、此注意の結果初学者諸君をして発音に逡巡はしめ、延いては語学者としての臆病者を造りはせぬかと云ふ虞があるから、省略すべきかと餘程考へたのでありますが発音法の順序としては是非必要だと思ひ、茲に簡単に一項を加へただけであります。’
- 4) 表の空欄は、記事に記述がないか、現在は使われなくなった表記である。
- 5) 表の発音表記は、「会話」には、二重母音の音価について説明がないため、用例の中から二重母音字の音価を取り出したものである。
- 6) 表の発音表記は、「文法」に初声がない二重母音字単独の音価の表記はないため、発音の記述の中から二重母音字の音価を取り出したものである。仮名で表記できない音はハングル文字を使っている。
- 7) 現行音も、「会話」や「文法」のようにハングル表記で良からうが、ハングル文字では音価を

明確に示しにくいので、音韻表記にする。

- 8) 『우리말본』は、初版が1929年であるが、今回参考にした版本は1984年の14版であるため、初刊本の記録を確認する必要がある。
- 9) 「ティ」の表記は、戦後の表記であるという意見もあるが、「会話」の「綴方」の発音表記例を見ると、既に「ティー」という表記がある。
- 10) この発音表記を解釈するには、二つの可能性があると思われる。まず、括弧書きされたのは現実音の音声表記で、そうでない表記は音韻表記であるということと、2種類の発音の存在を表記したことである。この発音表記については、1920年代までの日本語の音韻・音声表記に関して考察する必要があると思われるが、「会話」の発音表記に間違いがないという前提で、後者の解釈をとる。
- 11) 「文法」21頁。

参考文献

- 植田晃次他 (2006) 『朝鮮語教育史人物情報資料集』2005～2006年度科学研究費補助金基盤研究 (B) 「日本における朝鮮語教育史の総合的・実証的研究」(課題番号: 17320085) 報告書 (1)
- 植田晃次他 (2007) 『日本近現代朝鮮語教育史』2005～2006年度科学研究費補助金基盤研究 (B) 「日本における朝鮮語教育史の総合的・実証的研究」(課題番号: 17320085) 研究成果報告書
- 梶井陟 (1980; 1984改訂) 『朝鮮語を考える』龍溪書舎
- 金敏洙 (2008) 「[2] 33高橋亨「韓語文典」해설」金敏洙・高永根 編『歴代韓国文法体系 (第2部第14冊) 第2版』博而精出版社
- 金敏洙 (2008) 「[2] 41李完應「朝鮮語発音及文法」해설」金敏洙・高永根 編『歴代韓国文法体系 (第2部第21冊) 第2版』博而精出版社
- 田中徳太郎 (1924) 「朝鮮語会話」『朝鮮文朝鮮語講義録』上巻 : 『일제강점기 조선어 장려 정책 [7]』図書出版 亦楽
- 李完應 (1924) 「朝鮮語発音及文法」『朝鮮文朝鮮語講義録』上巻 : 『일제강점기 조선어 장려 정책 [7]』図書出版 亦楽
- 三ツ井崇 (2000) 「植民地期の朝鮮語問題をどう考えるかについての一試論—朝鮮総督府の「諺文綴字法」を事例として—」『言語と植民地支配』3号 皓星社
- 安田敏朗 (1999) 『「言語」の構築—小倉進平と植民地朝鮮』三元社
- 山田寛人 (2004) 『植民地朝鮮における朝鮮語奨励政策—朝鮮語を学んだ日本人』不二出版
- 山田寛人 (2000) 「日本人による朝鮮語学習の経路と動機—『月刊雑誌朝鮮語』(1926-29年)掲載の「合格者諸君の苦心談」の分析をもとに—」『言語と植民地支配』3号 皓星社
- 최현배 (1984) 『우리말본』정음문화사
- 허재영 (2004) 「일제강점기 조선어장려정책과 경성부조선어연구회」『일제 강점기 조선어 장려 정책 [1]~[9]』図書出版 亦楽

謝辞

本論文は、2008年度科学研究費補助金(基盤研究(B))「学習書を通してみる近現代日本における朝鮮語教育史の多元的・実証的研究」(課題番号: 20320081)の成果の一部である。また、草稿の段階で矢野謙一先生から様々なご指摘やご助言を頂いた。記して御礼の意を表したい。

キーワード 植民地朝鮮 朝鮮語研究会 発音教育 学習書の比較・分析
「朝鮮語会話」と「朝鮮語発音及文法」の相違点 各文字の音価

発音の対立関係の利用 学習書としての特徴 音の認識
学習書の分析の基準

(Oh Daewhan)

Analysis of Two Articles Related to Pronunciation Rules from *The Transcript of Korean Writing and Language Lectures*: For Establishing Classification Criteria of Study Books

OH Daewhan

The aim of this paper is to find characteristics of Korean language pronunciation teaching in Colonial Korea as well as analysis and comparison of “Korean language Conversation” and “Korean Language Pronunciation and Grammar” from *The Transcript of Korean Writing and Language Lectures* (『朝鮮文朝鮮語講義録』) published by “The Society of Korean Linguistics” (『朝鮮語研究会』). The author of this paper analyzes the contents of above mentioned articles to reveal differences of description related to pronunciation. Finding the differences enables comprehension of Korean language pronunciation teaching of those days. Moreover, it also enables understanding prospective classification criteria of studying books used for pronunciation teaching.

1) Vowels: there was no presentation of monophthongs; diphthongs of ‘y’ group have been confirmed. This is an evidence of false recognition of Hangul characteristics as well as teaching Korean with preferences to vowels coming from target language. The meaning of vowel is ‘sound’ but in both articles it is shown with a vowel letter. Order of vowels presentation in “Conversation” is according to typical order while at the same time, order in “Grammar” influenced by native tongue of learners, specifies vowels that don’t exist in Japanese language. Concentrating on description of vowel letters ‘ㅏ’ and ‘ㅑ’, the author compared and analyzed description of vowel pronunciation rules using ‘furigana’ printed in “Conversation,” generally rules of articulation are exposed by presenting phonetic value of individual vowels. Meanwhile, “Grammar” presents pronunciation of individual vowels naturally distinctive feature and association between vowels.

2) Through the comparison and analysis of ‘重中聲’ and ‘復母音’ constructed with more than two vowel letters, the author of this paper determined great differences in described phonetic values. Phonetic values of multiple vowels explained in both articles differ and it is necessary to confirm if they were pronounced accordingly to their phonetic values. The author formalized the necessity of reviewing bibliography containing pronunciation of multiple vowels for that period.

3) Consonants: as there were significant differences in consonant orders between the two articles the author concentrated on dividing in initials and finals. In “Conversation,” the consonants were strictly divided between simple consonants and aspirated consonants. The reason was simply comparison to Japanese language and intonation of Korean simple consonants were highlighted as light and soft; the adversary relationship between the sounds was not considered. The author was able

to distinct the differences between the description of phonetic values of consonants as well as between relationship between them on the bases of description of pronunciation of ‘ㄷ’ and ‘ㅌ’. From this, the author concluded that in “Conversation” the consonants’ phonetic value as well as the intonation were described simply, while in “Grammar” not only phonetic value of consonants but also relationship among them has been defined.

4) Conclusion form comparing and analysis of consonants is that the distinction between simple consonants, aspirated consonants and tense consonants has been noticed and described. In Korean language the difference between these three groups is significant; depending on absence or presence of them one may say if the authors were aware of the sounds structure and system.

5) On the analysis and comparison of finals, the author confirmed whether the finals were described individually or with relation to other final or vowel in both articles. Beyond doubt the description of multi-finals was alike.

6) Analysis and comparison of quote-unquote ‘change of sounds,’ made clear that as the authors of “Grammar” were native speakers of Korean language they were not able to define and explain ‘phonetics’ rules while authors of “Conversation,” who were foreign Korean language speakers defined above mentioned system. By contrast, rules of palatalization, not mentioned in “Conversation” have been explained in “Grammar.”

7) Finally, the characteristics’ analysis of both articles as studying materials, the author noticed that as a common point with the modern educational materials, the description and presentation of teaching items are alike; differences between past and modern texts concentrated on note of cautions of educational guidance. Moreover, in “Grammar” there were exercises along with every teaching unit, but there was no evaluation which makes this educational text more modern and contemporized.

Based on the above results, the author was able to establish below classification criteria for studying materials’ contents in Colonial Korea.

First of all, pronunciation teaching at that time was reliant on Hangeul which is phonographic system of writing. The significant difference is in teaching articulation by presenting sounds individually or by relationship with other sounds up to phonological structure.

Additionally, it is possible to define two categories: teaching simply pronunciation of Hangeul which is a phonographic system or presenting description together with pronunciation along with the phonographic system but at the same time showing differences between them (‘ㄷ도ㄷ디’) including e.g. palatalization.

Above mentioned differences may be seen not only in both articles but also in other educational materials of those days which is a base for studying books’ analysis.